



市民活動の 新たな挑戦

いろいろな悩みや不安、難題を抱える人たちを支え、問題解決に積極的に取り組む市民活動は各地です。野を広く、ファイザー製薬ではヘルスケアの分野の市民活動を支援し、その社会的認知を高めることを目的に、2000年から助成プログラムをスタートさせた。過去の実績にとらわれずに、活動のユニークさと将来性に評価の重点を置いているのが特徴。2002年度の助成対象となった各プロジェクト（左頁参照）を中心に、9回連続（今回は第8回）でレポートする。



写真上/2つ目にできたイナダハウスで過ごす子どもたち。大人の利用者の増加を見越して敷地内に作業棟の建設を予定している。写真右/養護学校の教員でもある田中理事長

特定非営利活動法人 障害者家族地域生活支援事業所 フリーダム十勝 重度知的障害者の デイサービス事業の創設（北海道）

知的障害児・者が 当たり前前に暮らしていける基 盤整備をめざす

人口約17万5千人、北海道帯広市に、重度知的障害児・者のレスパイト（障害者本人や家族に一時休息を提供する）サービスを提供する事業所「フリーダム十勝」がある。18歳以下の児童と18歳以上の知的障害者を対象にしたホームヘルプやデイサービス、送迎、宿泊を伴うナイトケアサービスなど利用者の必要に応じたサービスを行っている。

現在、養護学校の教員をしながら、理事長として奔走する田中利和さんは振り返る。その児童保育施設には、養護学校以外の特殊学級や障害児学級の子どもを持つお母さんから利用申し込みが数多く寄せられる。一方、養護学校のお母さんからは、利用者が増えれば自分たちの子どもが使えなくなるのではないかとという不安が出されたという。いずれにしても、障害児を持つお母さんたちにとって学校以外の部分で安心を得たいという気持ちに変わりはない。学齢期の障害児にとって児童保育の重要性を強く感じていた田中さんは、97年7月に町内会館を借りて、児童保育的なものをメインに養護学校卒業後の大人も利用できるレスパイト施設「フリーダム十勝」を立ち上げる。2年後には西帯広の一軒家を借り、「フリー

ダムハウス」と名称を変えて本格的にスタート。周辺地域からの要望が増えたため、02年5月には稲田町に「イナダハウス」をオープン。現在、帯広・十勝管内で4つの施設を運営している。

「学齢期の子どもは当然、年数が経てば18歳になる。養護学校の卒業後は、入所施設や作業所に行くことになるが、家族と離れた生活や、18歳になつたらすぐ働くということにはなじめない人たちがすごく多い。ですから、仕事ができなければ、朝から夕方までのんびり過ごしたり、学校の延長みたくに活動できるような居場所が必要なんです。児童期はいわば期間限定ですが、大人の場合はそのあと60年からの長い人生がある。障害者がその地域で当たり前前に暮らしていけるような基盤整備の一翼を担っていきたい」



活動の出発点となったフリーダムハウス。一軒家というのびのびとした環境のなかで、楽しく遊ぶ子どもたち

**2002年度
助成対象プロジェクトの
団体名・活動内容・
主な活動地域**

| | |
|----|---|
| 1 | 重度知的障害者の デイサービス事業の創設 特定非営利活動法人 障害者家族地域生活支援事業所 フリアム十勝(北海道) |
| 2 | 精神障害回復者 小規模共同作業所マップ 特定非営利活動法人 札幌作連(北海道) |
| 3 | 商店街で活動する精神障害者の ピアサポート支援事業 特定非営利活動法人 SAN Net青森(青森県) |
| 4 | 青年とまちの人とがふれあう場 「とらいスペース」の開設 特定非営利活動法人茨城NPO センター・コムズ(茨城県) |
| 5 | ひきこもり当事者による 雑誌発行プロジェクト 特定非営利活動法人 東京シュレ(東京都) |
| 6 | 女性アルコール依存症者 サポートセンター事業 特定非営利活動法人 ジャパンマック(東京都) |
| 7 | ミャンマー/ドーボン郡区 障害者支援事業 特定非営利活動法人 ワールド・ビジョン・ジャパン(東京都) |
| 8 | プライマリヘルスケア・アプローチ による路上死のない街へ 新宿連絡会医療班(東京都) |
| 9 | 摂食障害者の自立と成長のための ピアサポート事業 日本アノレキシア・プリミア協会 (東京都) |
| 10 | 病気の子ども支援のための 情報発信とネットワーク構築事業 病気子どもネット・京都(京都府) |
| 11 | 知的障害者の性の ワークショップ事業 特定非営利活動法人エンパワメント ・プランニング協会(大阪府) |
| 12 | 小児がん患児、家族の 精神的サポート体制の確立事業 特定非営利活動法人 エスビュロー(兵庫県) |
| 13 | 精神障害者ピアヘルパー等 養成事業 兵庫県高齢者生活協同組合 (兵庫県) |
| 14 | 在日外国人高齢者の地域における 居場所づくり事業 神戸定住外国人支援センター (兵庫県) |
| 15 | 芸術とヘルスケアの関わりによる まちづくり事業 アートステーションどんごや(宮崎県) |

*他に、12団体が継続助成対象としてプロジェクトを行なっています。

**【ファイザープログラム】
心とからだのヘルスケアに
関する市民活動支援**

2003年度 募集要項

1. 募集期間: 2003年6月16日～7月18日
2. 助成金: 1件あたり300万円を上限とし、本年度は15件程度の助成を予定しています
3. 助成の期間: 2004年1月1日～12月31日(1年間)とします
4. 対象となる分野: 特に次のようなプロジェクトを重視します。
 - 1) 成長過程にある人たちの心身のすこやかな発達を支援する活動
→ おもに10代が抱える問題を克服し生きる喜びをもつことを助けるもの
 - 2) 社会的な受け皿がないために保健・医療が受けられない人たちの心身のケアを支援する活動
→ 外国人、路上生活者、PTSD(心的外傷後ストレス障害)などの人々を対象とするもの
 - 3) 障害をもつ人や療養にある人たちの充実した生き方を支援する活動
→ 身体障害、知的障害、精神障害などの人々、難病、長期療養にある人たちの社会生活を豊かにするもの
5. 問い合わせ先:
ファイザープログラム事務局
プログラムの詳細は、こちら
<http://www.pfizer.co.jp/pfizer/company/philanthropy>



写真上/当事者によって運営されているNABAには仲間と出会い、分かち合える安らぎの場所がある。「言いつ放し・聞きつ放し」を基本にしたグループミーティングなどが行われている
写真右/障害の体験を持つ共同代表の鶴田桃江さん

**日本アノレキシア・プリミア協会(NABA)
摂食障害者の出会いと
分かち合いのコミュニティ
(東京都)**

**長期化、深刻化する
摂食障害者の自立と
成長を支える**

摂食障害は一般的に「過食症」と「拒食症」とされているが、多くの場合、過食と拒食を振り子のように行ったり来たりする。NABA共同代表の鶴田桃江さんも思春期に過食症になり、そうした自分が恥ずかしくてダイエットに走った。そして「体重計の目盛りが少なくなるにつれて身も心も軽くなるようなハイな気分」になって、そのうち何も食べられなくなり、気がつくとも身長167センチ、体重30キロを切るような状態だった。それでも自分は病気でではないといひ張った。「私のように摂食障害は過食・拒食だけでなく、アルコールや薬物に依存したり、ひきこもって家庭内暴力に走ったり、万引きといった症状として現れたりもする」という。

摂食障害の中には、当人がそのことを隠すので親や夫が気がつかなかったり、気がついていても「わがまま病」といったレッテルを貼って軽く考えられることも多い。そして極端な症状が現れてはじめて大変な病気だと大騒ぎする。だが、なぜそうなったかという「本人が心の奥底に抱えている不安感や自己否定感といった生きづらさまでは考えてくれない。家族も医者も世間も当事者の認識とは大きくずれて、周囲からの誤ったサポートや対応も数多く行われ、そして偏見にさらされ続ける」。だから過食や拒食などの症状が治まったように見えても、本質的な問題は残っていて、また繰り返す人も多い。

本人自身も生きづらさの原因を整理できないでいる場合が多く、NABAはそうした心の病を抱えた仲間たちが、自らの経験と生きることへの希望を分かち合う場所としての「摂食障害者だけでなく、他の団体とも出会いと分かち合いを広げることで、私たち自身の回復や成長につなげていきたい」というのが、鶴田さんたちの願いである。